

# 播磨町歴史 NEWS

まちの発展と文化財にまつわる秘話などを歴史ニュースとして紹介します。

▶問合せ 播磨町郷土資料館 学芸員 渡辺昇 ☎079 (435) 5000

## 播磨町名産タコ

播磨町の風物詩としてタコ干しがあります。播磨灘に面する古宮・本荘の漁港で水揚げされたものを加工するものです。江戸中期以降に日本各地の名産・名所を記した書籍が多く刊行されています。その1つ「日本山海図会」は、寛政11(1799)年に大坂の酒造家である木村兼葎堂けんかどうが記し、蒔月しとみかんげつが挿図を描いた書物です。その巻之四に高砂望潮魚や明石章魚いいたこ たことして紹介されています。明治時代になっても明治30(1897)年兵庫県発行の「兵庫県漁具図解」に章魚壺漁や章魚釣漁が使用図・構造図など図解で詳細に記されています。

江戸時代から現代に至るまでタコが名産であることがわかりますが、そのルーツは弥生時代さかのぼまで遡ります。中期に加古川市溝之口遺跡や神戸市玉津田中遺跡など播磨灘沿岸の遺跡から出土しています。大中遺跡からも多くのイダコ壺が出土しています。本荘蓮花寺構居跡からもイダコ壺が出土しています。マダコ壺も玉津田中遺跡などで出土していますが、出土量・遺跡とも少なく、小野市・多可町など内陸部に広がっていることが特徴です。遺跡は「鹿の瀬」を挟む淡路島西浦と東播磨に多く、出土量も多くなっています。玉津田中遺跡と淡路市富島遺跡では延縄の状態です。タコ壺漁は平安時代で廃れ、江戸時代に復活し現代につながります。タコ壺は土製のものに加えて本荘貝ほんじょうがい(ウチムラサキ)製さらに陶器・ガラス・プラスチック製が加わります。近世以降は瀬戸内海と日本海・九州と江戸湾でタコ壺漁が行われていますが、貝製が主流です。サルボウ・アカニシ・テングニシなどが使用されています。タコとともに本荘貝は名産が示す通り播磨町の特産で、本荘貝製タコ壺は播磨灘の特徴です。今年度特別展で各地のタコ壺を展示・紹介しますので、郷土資料館に足をお運びください。



▲播磨小学校でのタコ干し



▲東二見漁港の本荘貝製タコ壺

## 播磨ふれあいの家だより

### 紅葉が美しい養父神社へ

朝来市にある播磨ふれあいの家を拠点に、その先養父市まで足を延ばしてみませんか？

葉が美しい養父神社を散策する日帰りのプランをご案内します。播磨町役場と土山駅を出発・到着とするバスで送迎、ふれあいの家での昼食がついたお手軽な旅をお楽しみください。

▶日程 11月4日(金)、7日(月)、10日(木)、14日(月)

▶費用 3,500円(昼食代含む)

※最低催行人員10人。

#### ▶行程

- 10:00 土山駅
- 10:10 播磨町役場～各コミセン
- 11:00 市川PA(トイレ休憩)
- 11:45 播磨ふれあいの家到着(受付、昼食)
- 12:30 播磨ふれあいの家出発
- 13:10 養父神社 到着(散策、自由行動)
- 14:10 養父神社 出発
- 14:50 播磨ふれあいの家到着
- 15:10 フレッシュあさご(30分の買物)
- 17:00 →各コミセン→播磨町役場、土山駅到着



古くから「養父の明神(みょうじん)さん」と呼ばれ、農業の神として地元の人に親しまれてきました。



また、農耕に必要な牛の売買が養父神社の管理下にあったことから、牛の神様もお祀りしています。土地の人からの信仰があついた田舎の神社らしく、境内はひっそりとした静けさに満ちています。初詣には市内はもちろん、但馬一円から参拝に多くの人々が訪れます。また、兵庫県下でも有数の紅葉の名所としても有名で多くの観光客やカメラマンが訪れます。養父市観光協会ホームページより

▶申込み・問合せ 播磨ふれあいの家 ☎079 (678) 1481 朝来市多々良木1244-1

## よく学びよく育つ

播磨町教育委員会  
高見 嘉彦

あきらめない力・やり抜く力の大切さ

今年の夏の暑さはすさまじく厳しいものでしたが、オリンピックでの日本人選手の活躍は、猛暑以上に熱く感動的でした。96年ぶりのメダル、日本人選手初、16大会連続という言葉が新聞をにぎわしました。手に汗を握る試合の展開、地球の裏側で奮闘している選手に向かつて声援を送り、涙したのは私だけではなかったと思います。また、競技を終えた後の選手が発する言葉にも強く感銘を受けました。その中には、前回のロンドン大会で敗北した選手など、失敗や挫折を経験し、そこから立ち上がってきた選手が多くいました。そのような選手たちの精神力や挑戦心に対して、私たちは勝ち取ったメダルの色や数以上に価値を感じました。

たともいえます。そこで、「レジリエンス」「グリット」について紹介します。最近、心理学などで注目されている言葉で、仕事や人生で成功するために、才能や知能以上に大切だといわれているものです。意味は、「逆境や困難、強いストレスに直面したときに適応する精神力と心理的プロセス」「何があってもあきらめず、徹底的に戦い続ける資質」ということだそうです。注目したいことは、生まれ持った才能・知能の高さが「レジリエンス」や「グリット」をもっていることに関係しないということです。リオで活躍した選手たちは間違いなく、高い「レジリエンス」「グリット」をもっていったといえます。私たち、親や教師には「レジリエンス」「グリット」を高める指導を心がける必要があると思います。そのために、目先の成績、結果だけを評価するのではなく、その背景にある過程、取り組む姿勢にもっともつと焦点をあて、励まし続けることが大切ではないでしょうか。そして、そのことが精神的にタフで、夢に対する情熱や忍耐力を生み出し続け、結果として、成功を勝ち得ることができる子どもを育てることにつながると思います。